

## 討 論

### 【増測】

ただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

進行は京都橘大学歴史学科の増測が担当させていただきます。

進行役から恐縮ですが、まず阿部さんにかがいます。阿部さんの話には、北海道ならではの時代区分である「縄縄文化」や「オホーツク文化」といった用語がありました。耳慣れないことばだなと感じられた方もいらっしゃるかと思いますが、これらの用語について、阿部さんからあらためて説明をお願いできますでしょうか。

### 【阿部】

本州では一般的に、狩猟・採集・漁労による時代が終わり、その後、稲作文化が広がって弥生時代に移行しますが、そのときに北海道は稲作を行わず、狩猟・採集・漁労の文化を引き継いでいきます。ただ、それまでは自分の集落で食べる分だけを採集していましたが、縄縄文化時代になると、たとえばヒラメとかイワシといった一つの物に特化するという、いわば交易を前提とした狩猟・採集に変わります。

それと、一番違うのは、ずっと本州と交流をしているのですが、縄縄時代になると北方とも交流するようになるという点ですね。

このように、日本のメインストリームの時代区分とは違う時代文化が流れているというのが北海道の特徴でもあるわけです。そして、この北方との交流の中で、サハリンから海獣類の狩猟をする人たちが北海道の道東や道北、最も南は奥尻島にまで来てオホーツク文化が広がり、本州の文化と融合した擦文文化に変わり、そしてアイヌ文化が生まれるというように、独特の歴史・文化が流れていると思っています。

### 【増測】

ありがとうございます。みなさんのお手元の阿部さんの資料の中に、「縄縄文化の概要」というタイトルで、日本と北海道と西洋の時代区分と文化の呼称の違いが載っていますので、ご確認ください。オホーツク文化とトピニタイ文化の違いについてはどうでしょうか。

【阿部】

北海道では、縄文文化の時期にサハリンから南下したオホーツク文化が入って、北海道の中でも二つの文化に分かれるときがあるのです。トビニタイ文化は、そのオホーツク文化が在地化したものとして区分しています。

ですから、同じ北海道でも、ずっと一つの文化が展開したのではなくて、異なる文化が入ってきたときがあるということです。

【増測】

オホーツク文化という名前にあるように、だいたい道東・道北を中心とした文化と考えてよろしいのでしょうか。

【阿部】

そうですね。

【増測】

次に中久保さんうかがいます。会場からの質問とも絡むのですが、民族誌からみたジェンダー性別分業論の話で、男性の比重の大きい仕事と女性の比重の大きい仕事を示した表を挙げられました。これについてもう一度、簡単に説明していただけますか。

【中久保】

MとFが逆ではないかというご質問がありました。きょうは女性

歴史文化研究所の発表なので、先に女性(F)の優位労働の話から始めました。そのために誤解が生じたかもしれません。M、M-と書いてあるのが男性優位労働です。肉体労働が多く、どちらかといえば集落から離れて行く傾向が強い労働です。F、F-は女性優位労働で、衣類や食に関する仕事が多くなります。

それから、「水を運ぶのはけっこう大変な肉体労働ではないか」というご質問もありましたが、この時代は、川の比較的近くに集落があったり、集落の中に井戸があったりしますので、水を運びに数十キロ離れたところに行くような距離ではないということです。男性優位労働は、地理的に言うとき数日から数か月かかるような部分も多少含まれていますので、そういう仕事は男性優位労働になっているという点は補足して申し上げておきます。

【増測】

私の専門は日本古代史ですが、古代でも『今昔物語集』などを見てもいきますと、子どもや女子の労働に日常生活に関わる水くみが出てきたりします。ですから、中久保さんがおっしゃったように、どうやら水くみ労働は、分業が行われている社会においては女性労働、あるいは子どもの労働に分類される傾向が強いのかなという気もします。

中久保さんに分業の話振りしましたのは、会場からのご質問もあつたからですが、ジェンダーから見た社会分業は古墳時代にはかなり確認できるというお話があつたからです。たとえば埴輪は、彩色などで男女のはつきりとした違いがあるのでしょうか。

【中久保】

埴輪は、粘土で成形して焼くのですが、赤彩といった単純なものを除けば、色が明確に残っているものはあまり多くなくて、その辺りはよくわからないことがあります。考古学者、特に埴輪を研究している考古学者はむしろ、窯で焼いた埴輪なのか、それとも窯で焼かずには野焼きをした埴輪なのかというところに注目しがちで、それで年代がわかることもあります。そういう状況ですから、阿部さんがお話をされたような、性別が色でわかるような資料は近畿地域ではあまり明確ではなくて、意外に灰色の埴輪が多いということがあります。

一方、東日本、栃木県の甲塚古墳かぶつかでは、彩色されている埴輪がありまして、色の復元で古墳時代研究者を一番驚かせたのは白地に朱の水玉模様の服が表現されていたことです。埴輪群には、赤・白・黒・灰の彩色があり、こうした埴輪は、男性と女性の区別があった可能性がありますが、まだ研究が始まった段階でもありますので、考古学界で十分にわかっているわけではないということになります。

【増淵】

縄文時代は性別による分業のようなものは考えられるのですか。

【阿部】

なかなか証拠はありませんが、考えられると思います。たとえば狩猟具の矢尻など石器を作るのは男性だろう、というのは容易に想像できるとかと思いません。

では、土器を作ったのは男性か女性かということですが、縄文土器はご存じのとおり、かなりゴテゴテした紋様がたくさん付いています。一見すると自由に作っているようですが、ある地域のある時代ごとに決まったパターンの紋様で作られています。これは、たとえば民族衣装のようにすぐきれいで、自由に作っているように見えるけれども、その一つひとつの紋様パターンの中に自分たちのルーツに関する物語があるというように、われわれには読み解けないけれども、紋様には何か理由があつて、それで同じ紋様のバリエーションで作っていくのだろうと思つています。

そうした観点で考えると、土器は民族衣装のように、お母さんが作って娘に伝えていくというふうに、物語と一緒に土器を作っているのだろうと、私は考えています。

ただ、晩期になって、精製土器をたくさん作るようになったときに変わった(男性へ)のかなという感じは受けています。これはあくまでも受けた感覚であり、証拠はないのですが、私はそのように感じています。

【中久保】

最近、アメリカでネイティブ・アメリカンの土器に付いた指紋から男性か女性かがわかるのではないかとという研究論文が出ていて、従来は「女性が作っていたのだろう」と想定されていたけれども「実際は違うのではないか」という研究結果があります。

一九四〇〜一九五〇年代の旧ソ連の研究者たちがそういう研究をし

ていたというのはあるのですが、本当に指紋で性別がわかるのかが問題だということ、指紋の幅が違うという議論もしています。土器は焼くので、収縮率によって変わってくるのではないかという議論もあって、個人的にはもう少し慎重な検討が必要ではないかと思つています。

#### 【増測】

今度は阿部さんのお話から取り上げさせていただきます。阿部さんは、足形付土版を材料にして、幼くして死んでしまった子どもに寄せる気持ちや家族のなかで共有していく記念品だったのではないかという可能性や、成人ながら極端に細い人骨から、独り立ちしにくい身体条件の人間が介護されながら共同生活をおくっていたのではないかという興味深いご指摘をされました。

古墳の出土品からは、同様の例は考えられるでしょうか。

#### 【中久保】

日本は酸性土壌ですので、古墳の人骨が検出される事例自体が非常に少ないということがあります。もしかすると、そういう人骨も一定程度は認められるかもしれませんが、どの程度の比率か、どういう事例があるのかと言えば、近畿地域では現在のところ目立った事例はないというか、わかっていないところが多いかなという気はします。

一方で、東日本には古墳時代に造られた、硬い岩盤の横に穴を掘つて、そこに埋葬する横穴墓があります。横穴墓は関西にもありますが、

最近、東京近辺の横穴墓に先天的ではありませんが、足の不自由な方が埋葬されているという事例が、発掘調査報告書で報告されています(『新井宿横穴墓群Ⅴ 発掘調査報告』大田区教育委員会、二〇二一年)。

古墳の事例ではありませんが、古墳自体の数が六世紀から七世紀にかけて増えてくるということがありまして、その中には体の不自由な被葬者が含まれていることもあります。それも成人を迎えた人骨ですので、縄文時代と同じような価値観といえますか、社会が非常に階層化したからといって、体の不自由な人たちを置いていくような感じではなかったのではないかと私は考えています。

#### 【増測】

会場から、葬られ方に関するご質問がいくつか出ております。女性の葬られ方やお二方ともお話しになりましたが、たとえば女性と一緒に葬られることに抵抗があるのか、ないのか、あるいは、単独で葬られることが一般的で、複数と一緒に葬られたり同じところに葬られたりするのは例外的なのか、それとも一般的なのか、というご質問です。阿部さんはどのようにお考えでしょうか。

#### 【阿部】

縄文時代の貝塚の調査では、先ほどの胎児の骨と一緒に出てきた妊婦の人骨もあれば男性の人骨もあるので、同じ墓域の中に男性も女性も一緒に埋葬されているということになります。一つの墓の中ということではなく、その墓域の中で男性の墓も女性の墓も一緒に造られる

ということ、特に区別なく造られているという感じを受けています。

【増測】

胎児を持った女性の場合、ベンガラが撒かれていたということですが、それはかなり特殊なのですか。

【阿部】

特殊ではありませんが、あの胎児と一緒に埋葬した墓だけはかなり厚く撒かれていたようなので、一際丁寧に埋葬した感じが伝わってくるということですね。

【増測】

古墳時代はどうですか。

【中久保】

古墳時代は、基本的に棺に納めるのは一人ですが、棺に二人認められる例もあります。また、竪穴式石室が三世紀半ばから五世紀、横穴式石室が五世紀の終わり頃から七世紀頃まで造られて、同じ石室内に二つ、ないし三つの棺が納まっていることがあります。必ずしも「一人でなければだめだ」ということではありません。ただし、同一石室に二つの棺があり、夫婦ではいつている棺の多くは中国系ないしは朝鮮半島のなかでも百済の地域を経由してきたような渡来系集団で、奈良県桜井市や大阪府南部、滋賀県大津市近辺などにはそういう事例が

あります。

しかし、基本的には、キョウダイが多いです。人骨を研究している方からすると、人骨をみれば「ああ、これはキョウダイだな」と、なんとなくわかるようで、だから、キョウダイが多いということがわかるわけです。

ただ、それでは論文にならないので、歯冠計測法を用いて、確実に遺伝的に一致するかどうかを調べます。歯はけっこう遺伝性が強いので、歯冠を計測することによって血縁の有無を確定できるわけです。

また、現在は、古墳から土器と埴輪が出土したら、だいたい二〇年刻みでその年代がわかるようになっていきます。そうすると、副葬されている土器や鉄剣や甲冑なども二〇年単位で編年されていますので、「時期差があるから、親子だろう」ということになりましたが、副葬品はほとんど時期差がないことがわかってきました。ということは、ほとんど同時期の副葬品の場合、同時期に親子が亡くなったと考えないとすると、「やはり順番から見ても、キョウダイだろう」ということで、キョウダイが単位としてはわかってきているところになります。ですから、キョウダイの結びつきは現代より強かったのかもしれないなと思います。

【増測】

婚姻関係と埋葬の仕方が、切り離されているということですか。

【中久保】

そうですね。考古学界でも議論はありますが、結婚しても出身地に戻って埋葬されるほうが一般的だっただろうと想定はしているところ  
です。

【増測】

阿部さんのお話にあった足形のついた土板についてですが、大人の足形付土板はないのですか。

【阿部】

大人の足形はないのです。一番小さいのが六・七cmで、一番大きいのは垣ノ島遺跡の近くの豊原四遺跡から出た一八cmの土板で、その範囲でバラバラの大きさがあるということです。大人は、子どもの足形付土板の裏側に手で押さえたときの手形があるくらい。やはり子どものためのもので、それも六cmから八cmくらい、年齢でいえば一歳から二歳くらいまでが一番多いです。

【増測】

足形が出る地域や縄文遺跡の時期には限定があるのでしょうか。

【阿部】

かなり限定されます。縄文時代はBC七〇〇〇年頃を境に早期・前期に分かれるのですが、細かく言うと東釧路IV式という平底の土器が

あって、それが一時期、丸底になるんですね。これは一〇〇年より

もつと短い時間だと思えますが、その時期に限定されているので、作られた時期は早期から前期に変わる間の数十年間で、範囲としては道南地域と対岸の苫小牧辺りに限定されているということです。

この時期区分があるときというのは、気候変動か何かで生活が変わっている。この直後に駒ヶ岳で大噴火があるのですが、その前から何か環境の変化があったのかな、という感じは受けています。

【増測】

地域や時期が限定されていて、後世には引き継がれていかない風習があるのですね。

【阿部】

そうですね。だから、その時期に状況が大きく悪化するとか、何かあったのかなと考えています。その後、足形付土板が中期・後期でも出るので、それは墓から出るのではなく、それこそ記念品のような感じでポツポツと捨て場から出ます。

墓からこういう形で出るのは限定された時期だけです。その丸底の土器が出てきたときは、「この遺跡から足形付土板が出るかも」と先に予測できたほどでした。それだけ特殊な時期です。

【増測】

画像で拡大してしまうと本当の大きさが実感できないので、ご興味



がおありの方はぜひ函館市縄文文化交流センターに足を運ばれて、実際の展示物をご自分の目の高さでごらんいただきたいと思います。私は初めてこれを見たとき、思わず涙が出そうになって、「こんな感性があったのだな」と思うと、すごく切ない気持ちになりました。

【阿部】

発掘調査は地元のお母さんたちが作業員として働いているのですが、やっぱり最初に掘り出した人は足形の付いた土板を見て、ポロポロと涙を流していましたね。

【増淵】

会場のみなさんも、ぜひ函館に行って、泣いてくださいね(笑)。それから、土偶は女性をかたどったものだというお話でしたが、「子どもという可能性はありませんか」というご質問が来ています。

【阿部】

たとえば遮光器土偶の目は胎児の腫れぼったい目を象徴しているのではないかとか、縄文時代後期の土偶から男性的な要素が加わるなどさまざまな変化があるので、その解釈はいろいろできるのかなと思います。

【増淵】

「新生児の目ではありませんか」という会場の質問は、まさに考古

学者の考察にアクセスするものだったということになりますね。会場においてになっている方で、ぜひ質問しておきたいという方はいらっしゃいませんかでしょうか。

【会場からの質問】

阿部先生のお話には赤ちゃんとお母さんのことが出てきましたが、たとえば日本では、戦前までは、たくさん産んで、たくさん亡くなり、戦後は少産・少死という感じだと思えます。縄文時代は、赤ちゃんがたくさん亡くなったときも手厚く埋葬していたのでしょうか。

【阿部】

だいたい五五〇〇年くらい前に円筒土器文化が北海道に広がりました、そのときは土器を逆さまに埋めて、穴を開けています。これは、人骨そのものが出ていないので何とも言えないのですが、死産や生まれて間もなく亡くなった子どもを埋葬したのではないかと考えられています。

それから、古墳時代のお話にも出てきましたが、妊娠して、出産間際になると骨盤に痕がつくので、それによって何人出産したかはわかって、たぶん三人ぐらいが多いと思います。そこは私も専門ではないのでわかりませんが、そういった事例はあります。

【増淵】

最後に私から話を振りたいのですが、阿部さんは北海道・北東北の

縄文遺産群という世界遺産を、中久保さんは百舌鳥・古市古墳群の事例を取り上げながら話してくださいと、世界遺産という点では共通する材料を扱っていただきました。

世界遺産という点、よく「登録された後は観光振興につながればいいかな」とか、あるいは登録されるための努力で力尽くしてしまつて努力がなかなか継続されないなど、いろいろな問題点が指摘されます。

世界遺産に登録されたという結果を踏まえて、文化的な遺産を本来の意味で生かしていく可能性はどこにあるでしょうか。あるいは、どんな方向性が望ましいでしょうか。いまお考えになつていることや、実際に取り組もうとされている企画などがあれば、お話をしたいだければと思います。

#### 【阿部】

やはり私も同じ危機感を持っていて、なぜ世界遺産を目指したのか、世界遺産の本来の意義は何なのか、という原点に立ち返るべきだと思つています。先ほども少し話が出ましたように、世界には多様な文化があり、異文化共生ということによって国際社会での理解を深めていくことが一つの方向性としてあるのだらうと思つています。

このシンポジウムで取り上げた縄文と古墳は、もうまったく別の世界です。巨大な権力の中で造られた古墳と、私たちと同じ普通の人の生活の痕跡ですからまったく違う。これは、どつちがすごくて、どつちがすごくない、という話ではなくて、これこそまさに文化の多様性ということですね。ですから、日本にはこういう多様な文化があ

るのだということを世界に発信していくことが大事ですし、国内ではそういった文化の多様性を認め合つていくような企画を行うことによつて、心豊かな社会になつていくのではないかと思つています。

それと、先ほど「ESD」に触れましたが、「日本には自然の恵みの中で一万年間も存続した縄文の人たちの暮らし」があり、縄文を学ぶことによつて、人間はどのように自然と向き合つてきたのか、どのように命を大切にしてきたか、ということを知ることができます。そのことによつて、新しい価値観に触れ、自身の考え方が少し変化していくような活動を、私は続けていきたいと思つています。

#### 【中久保】

大阪では初めて百舌鳥・古市古墳群が世界遺産になりまして、私もつい二週間ほど前に放送大学の授業で、登録後の百舌鳥古墳群を一日まわつてきました。意外に思つたのは、登録前に比べて古墳をデザインしたTシャツを着た人がとても増えているんですね(笑)。それに古墳のまわりでマラソンもしていたりして、「ずいぶん変わったな」と思いながらみていました。

やはり地域に対する愛着のようなものが、世界遺産の登録推進のなかで醸成されています。これは行政が主導する形ではなく、市民の皆さんが「こんなおもしろい文化遺産が地元にある」ということを知るといふ点が非常に大切なことかなと思つています。この数年間の世界遺産はそういう方向にだんだんシフトしてきているのではないかと思つています。



これから二〇年先の日本という国を考えると、人口が一定程度保たれている地域と、かなり人口が減る地域が出てくるのが予測されています。そういうなかで、自分たちが生まれ育った地域には貴重な文化遺産があるということを知るのには、日本列島全域で考えると大切なことだと思えます。たとえ世界遺産に登録されていなくても、「自分たちの地域には、そうした世界遺産と関係がある文化が遺されているし、より独自のものがある」ということも歴史遺産を通してわかることです。こうした文化財保護の精神が教育にうまく活かされていけばいいかなと考えているところです。

【阿部】

いまの中久保さんの意見にまったく同意します。世界遺産は、大きく考えれば地球遺産であり、身近に考えれば地域遺産でもあるのですよね。「自分たちの地域にこんな遺産があったんだ」と知ることによって、それが郷土愛につながり、まちづくりにつながっていくということがあります。

そして、世界遺産をきっかけに、まだまだ知らない身近にある文化財に目を向けていくことも大切ですし、「自分たちのまちにも、まだこんな文化財があるじゃないか」ということを掘り起こす活動につながっていくことも、世界遺産登録の役割の一つだと思います。その点を付け加えさせていただきます。

【増測】

ありがとうございます。北海道・北東北の縄文遺産群は、けっして世界遺産に登録することを目的に調査を続けてきたわけではなくて、むしろ多様な調査・研究から発信された意義が広く認定されて、世界遺産の登録となった。そこには地道な調査や研究あるいは遺跡保護の取り組みと、そしてそれらを活かすために一緒に関わってくれた地域の大勢の方たちの力がある、ということは間違いがありません。

単純に大きな集落跡だとか、古い遺跡だから重要だというのではなくて、いままで得ていた成果をヒントにしながら、調査・研究を息長く続けていくところから、たとえば貝塚はごみ捨て場という認識でよいのかなど、縄文の遺跡や遺構の新たな理解が生まれてくる。次々と生まれてくる新しい発見や疑問が、その遺跡が所在している地域の歴史像を豊かにしていくことにつながっていきます。北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録はその結果でありましょう。

遺跡や遺物を研究することによって、それを通して見た過去の人間の歴史に対する認識が変わってくる。認識が変わることを通じて、われわれ自身の現在の生活に対する視線も変わったり、豊かになったりするのではないかと。そういうところに関わってお話ししていただければいいテーマで、今回のシンポジウムを企画しました。それだけに、あらためて感謝を申し上げます。

それでは、ちょうどいい時間になりましたので、これでパネルディスカッションを終了したいと思います。ありがとうございます。(J)